

港口足跡

十 コルネリオ会

(キリスト者自衛官の会)

ニュースレター 第24

1978年12月

* クリスマスメッセージ

[マタイ 2-1~11]

今年もクリスマスシーズンとなり、会員各位も年末の忙がしさの中に明け暮れている事と思われる。我国の特技である科学技術もさらに次の飛躍目ざして繁栄に向って苦悩している時期であろう。しかし益々増加し続ける世界人口を十分に養うためには、食料だけを考えても全体では不足であるし、現在のままの文化を維持するためには、必要なエネルギーだけを考えても、新しい開発の必要性が叫ばれている。かくして人類は、月旅行を実現し、原子力によるエネルギー利用法を開発し、また近代医学は画期的な発展をとげ、生理学の知識は新しい生命の機構にまで及ぼうとしている。

しかし一方でこれらの科学技術の開発に関与すればする程、その底の深さに思い至らなければならない。

例えば人間の一器官の働きを考えても、その複雑で微妙な点に関しては、到底人知の及ぶ所ではなく、これを真似して作るという事はとても考えられる事ではない。その器官の代表的な機能の一つを真似する事がやっとなり、ロボットは如何に進歩しても人体の精巧さにくらべたら全くおもしろみに等しく漫画の域を出ない事を知らされる。科学を少しでも考えるならば科学万能等という言葉は全くおこがましい話と言わなければならない。

このように人間に与えられている科学技術は真理のごく一部分であり、残りの真理については未だ深い未知の中に閉ざされているということであ

る。

初冬の早天に星を仰ぐ時、その星の過去、未来について、我々が進歩した天文学の助けによって知り得るのは、現在の状態の延長としての存在であり、それだけが頼りであって、その奥に果して何があるか、何時どのような変化が起るのかは、正確には何もわからない。そしてその事は2000年前の東から来た博士達(マタイ2-2)も同じであったであろう。彼等は当時の文書文献をあさりながら、ユダヤの王の誕生と星との因果関係について学び、その出現を確かめるために、はるばる異国の地にやって来た、そして文献の教える通りに従って、残酷をもってなるヘロデ王の所に来て憶面もなくその後継者について問いただした。

真理に対する一途な態度は今も昔も同じである。

そして彼らが「王の言う事を聞いて出かけると、見よ彼等が東方で見た星が彼らより先に進んで幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった」と書いてある。この星がどんな星であったか、流れ星であったか、すい星であったか、または何か明るい星が明滅して見えたのか、現在それはわからない。しかし彼等は文献に予言されていた通りにそこでユダヤの王といわれる幼な子にめぐり会ったというのである。

聖書によれば、神はその一人子をあがない主として、この世にお送りになったのに、選民といわれるユダヤのパリサイ人達は、それを認める事が出来ず、そのため彼等は後に残され、我々異邦人といわれる全世界の民が、こうして先に神の国に入る機会を与えられ、今が恵みの時となっているという事である。その救いの実現のためにあがない主であるイエスキリストが聖霊によってみごもってマリヤからこの世に生まれて来られたのである。

聖書は血を流すことなしに罪のゆるしはあり得ない(ヘブル9-22)と言っているが、旧約聖書は罪の中にある普通の人間の血によっては罪の清めがない事を長々と説明している。また動物の犠牲による清めは一時的であり、それは旧約の終りの時に一度この世に現われた神の子イエスによるあがないの予表であると言っている。

またイエスキリストの誕生については「その有様は人と異ならず」（ピリピ2-7）とあるから人間の組織肉体を持っておられたので、その受胎も我々同様細胞の減数分裂から始まったものと思われる。その始めの細胞は48個の染色体を持っており、その半数の24個はマリヤから受けた。これは人間から受けたのだから完全ではなかったであろう。しかし残りの24個は聖霊から受けたのだから完全無欠であり、この二者が一体となった時、不完全な半数はそれと対となる残りの半数に完全にカバーされて完全なものが出来上がったものと思われる。

聖霊による染色体とは何であろうか、これは現在の科学ではわからない。これは統計的に再現される事はないであろうし、聖書には一度だけと書いてあるのだから神は再びこの事を起こさないであろう。若し神がこの事を科学を通して人間に示される時があるとすれば、それは最後の科学ではなからうか。自然界には単性生殖もあるし、似た現象はあるかも知れない。しかし聖書が言っているイエスの誕生はそれらとは全く別な事なのである。

この細胞はマリヤの胎内で育ち、月満ちてみどり子が誕生した。それらはすべて聖書の予言のとおりであった。これがクリスマスである。

我々はこの世にあっては兎角眼前の事のみを意を奪われ、物質を超えた霊の世界の事は見えない。しかしだからと言って物質を超えた世界が無いわけではない。アジアの一角に起って、ギリシャ、ローマに始まり、ヨーロッパ、アメリカを回り、今や全世界に行き渡ろうとしている福音の波の中にあって、この救い主の生誕の日を記念して祝う事は我々クリスチャンにとっては大きな喜びであり、この世の人達にとってもまた大きな希望の光明ではなからうか。

✿ “Know Your Bible” (第10回)

著者 W. C. Scroggie

訳者 宮崎 健男 (金沢フィラデルフィア教会牧師、防大8期)

マルコによる福音書

鍵の言葉：奉仕「私の僕を見なさい」

ローマにて書かれる。ローマ人のために書かれる。牛の様な面を持つ。

働きの福音。

著作年代 紀元後50～55年

著者

ヨハネマルコはマリヤの息子でエルサレムに住んでいた。(使徒12-12)彼の名前は新約聖書の中に8回出て来る。ヨハネが、ユダヤ名であり、マルコがローマ名である。

パウロの宣教生涯の始めとその終わりに、マルコは彼と一緒にあったが、これらの期間の間にはペテロと一緒にいた様である。

マルコがこの福音書を書いたと言うのは、非常に古くからの伝承であり、紀元後120年のパピアスの時代にさかのぼる。パピアスは彼のことを「ペテロの通訳者」として語っている。使徒の働き10-34～43はペテロの説教の要約であり、マルコの福音は本質的にはペテロの口述のメッセージの全文である。「通訳者」と言う言葉によっておそらくパピアスは「翻訳者」を意味したと思われる。即ちマルコはペテロが述べ伝えたと思われるアラム語をギリシャ語に翻訳したのである。

読者

この書の見解はマルコがローマ人の読者たちのために書いたことを強く支持している。

この証拠は外面的及び内面的である。概して旧約聖書からの引用に欠けている。ローマ人が知らない言葉の意味は翻訳されている。(マルコ3-17 5-41 等)

ユダヤ人の慣習は説明されている。(マルコ7-2 15-42)オリブ山の位置が示されている(マルコ13-1)ユダヤ人の律法については言及されていない。

他の記録にはのっていないラテン語が記されている。(マルコ6-27、7-4、10-42 等)

記された場所

マルコはこの書をエジプト、アンテオケ、シリア又カイザリヤで書いたと主張されて来たが、証しを重視する時、記された場所は、ローマと見える。この見解はペテロ第1の5-13に於いて、もし「バビロン」がローマを意味するならば、主張し得る根拠を持つ。

著作年代

この福音書は、エルサレムの破滅の紀元70年以前に書かれたものと思われる。また四福音書中第一のものであることも確かである。

ルカによる福音書が紀元後約56年から60年にかけて書かれたので、マルコの福音書は紀元後56年以前に書かれていたものに違いないのである。エーティローバートソン博士は最も確実な年代として紀元後50年をあげている。ヤコブ書を除いては新約聖書中最も初期の書物である。

文体

全福音書中マルコによるものが一番絵画的でありまた単刀直入である。彼の言葉は小さな絵である。彼の好んだ時制は未完了時制でありまた歴史的現在形で、読者の前に、実際生活の行動と動きを引き立ててくれるのである。(1-30、37比較)モリソン博士は、マルコの文体は、「古典的でなく、摂理的であり、どの種類の『言葉の知恵』にも欠けている。それは質素であり、飾らず、文学的手法または技巧の全くないものである。」と述べている。この素朴さが、少なからずこの書の魅力である。

目的

開口の言葉はその目的を述べるために用いられるであろう。(マルコ1-1)即ち日常の活動的な生活を送って来た、また人々の中で全精力を傾けて生活し、働いて来たイエス、また屈辱を忍んで勝った僕としてのイエスを提供することである。(ゼカリヤ3-8、イザヤ52-13 53-12)10章の45節は福音を要約している。「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。」11章-16章。

特色

これらの中で福音は富んでおり、少数のものだけが名付けられるのである。ここには、18の奇跡があり、その二つはマルコによる福音書にのみ記されている。また四つのたとえ話があるが、その一つは、この福音書だけのものである。どのたとえも発展がなく、長い解説もない。マルコだけが、使徒たちが「食事ができない程に暇がなかった」と二度語っている。41回彼は(eutheos)と言う語を用いているが、それは「直ちに」「程なく」「すぐに」「一步一步」「すぐさま」「～するや否や」また「きびしく」と言うように、色々に訳されている語である。彼のみが、キリストが敵から逃れるためにまたは祈りによって彼の魂を新たにするために奉仕の最中で退かれた少くとも11以上の出来事を我々に告げてくれるのである。彼のみがイエスが「大王」であったことを語り、ナザレに於いての不明瞭な年月に光を照らして下さるのである。繰り返しの強調はマルコの特徴である。(例えば1-45, 48, 14-68等) また彼は詳細に書き記している。(例えば3-16, 10-46, 5-13, 6-7, 1-35, 4-35, 11-4, 12-41, 6-32, 1-41, 43, 8-12, 23等)

これらの詳細やまたこの様なことは、名前や番号や、時や場所や、色や感情に関してもである。

ノート

マタイの福音書中、1068の聖句の中で約500はマルコによる福音書661聖句からであり、ルカの福音書1149の中、約320回がマルコからである。唯20から30のマルコの聖句だけがマタイにもルカにも見出されないのみである。(次回へ)

* 日本キリスト教団出版「信徒の友」投書に対する反論

矢田部稔兄(陸幹校)から上記「読書のひろば」投書欄の河瀬氏の投書に対する反論を掲載するよう依頼がありました。なおこの反論は同投書欄に投書した所、日キ教団出版部から「教団の置かれている全般的な状況か

ら本稿は掲載しない」との註がついて返送して来たものです。

◎ 「河瀬伊勢子（鎌倉教会牧師）氏の投書要旨」

去る6月7日国会で、大規模地震対策特別措置法が可決、成立した。地震国に住む我々は、地震の怖さ、地震対策の必要とその困難についてはよく聞かされており、この法律の成立を歓迎する人も多いと思われる。しかしこの法律のねらいは全く別の点にある。同対策法は、マグニチュード8級の地震の予知宣言が出されれば、災害発生前に総理大臣の権限で自衛隊の防災出動が可能であるとしている。自衛隊が出動するや、町は一種の戒厳令下におかれ、たとえ予知宣言が空振りでも地震が起きなくても、指示に従わない行動は犯罪となり、罰せられる。つまり同対策法は災害対策という仮面をかぶった治安立法といわざるを得ない。また現実には地震災害が発生した際の自衛隊の救済活動が、住民第一ではありえないと考えられる。昨年9月横浜でのフェントム墜落事故で、負傷した子供より先に無傷の米軍パイロットを救出したことからも明らかである。自衛隊の救済活動は何よりも中央官庁や大資本施設の保護を目的としている。……

◎ 「矢田部稔兄の反論」

「地震対策法」関連の御発言は、直接的には自衛隊に対するものではなく政治一般に対するものであるが、自衛官であり教会の一員である私には納得できない。

ここでは、個々の指摘事項に触れず自衛隊について根本的に問うてみたい。御提言の真意も自衛隊の地震における活躍反対ではないと思われるから。

たまたま「福音と現代」9月号に宗教改革者の宗教に関する倉松功氏の論文がある。

「世俗の公権力を積極的に意味づけることのできない宗教は、隠遁するかその宗教自身が権力を奪取するかしなくてはならない。宗教改革者たち

の教えには、教会論と共に国家論や世俗の公権力論が含まれていたが、公認の宗教となり得なかった傍流のそれには小集団としての教会を超えて、国民生活全般にわたってその責任を負おうとする教説には欠けていた。」

戦後日本のキリスト教会には、敗戦の体験、軍国主義に対する反省或は軍隊にいじめられたことなどから、軍隊に対する復しゅう的な気持を自衛隊に代射することにより、戦争の罪悪感を拭いまたアジア諸国との連携を深めることができることもする傾向が強い。

かくして、自衛隊を不可触視し30年を経過しても感情的拒否反応以外に自衛官論は欠落のままである。倉松論文の傍流は日本の主流となり、全体としては世界の傍流へと進んでゆく。

アジアでも非共産主義諸国ではキリスト者の軍人は少なくない。軍人を教会からはじき出す教説を徹底させてゆけば、いずれクレームを付けられよう。

私は今春、韓国を訪問し教会と軍隊の相互協力状況を一瞥したが日本では想像できないものである。私の滞在間、将兵1527名の集団洗礼があったが、チャプレンのほか一般の牧師多数がその御用に当たっていた。

鎌倉教会及び神奈川教区に現在或は将来において属する自衛官及びその家族に対する牧会的な配慮も欠くのは残念である。

＊ Mc Donald 氏歓迎会

米国OCFのMc Donald氏が夫人と共に約一週間日本および韓国を訪問された機会に、11月19日(日)15:00 からホテルオータニのMadoc師事務所で開催を行った。Mc Donald氏は元在日OCFの代表であったが停年後、現在の米国OCFに所属して各国のOCUの発展のために労しておられる。またMadoc師も元OCFのメンバーであったが現在は米国のミッションに属して、ホテルオータニのGarden Chapelを主催しておられる方である。

日本側からは、千葉愛爾牧師、武田会長夫妻、矢田部稔兄夫妻、滝原博

兄、今井健次兄が出席、久し振りに回らぬ舌で英語による交歓を行った。
 なおその席で Mc Donald 氏から、中南米諸国、アフリカ諸国、西ドイツ、
 インドシナ、フィリピン、韓国等の O C U の活動についてのお話があった。

＊ 通 信

○ 滝口 廉太郎兄、絹子姉（檜町）

ニュースレター中野島キリスト教会牧師、後藤茂光先生からお貸りして拝見いたしました。主人は檜町基地勤務の二等空佐で、その妻私も共に鶴川福音教会で奉仕させていただいております。一年程前このニュースを拝見し、白衛官のお家族と交りをいただきたくと存じておりました。その後私達の教会に於ても、いろいろと試練の時があり、そのために祈り、神の導きにより支えられ今日に至りました。主人の父は川崎キリスト教会の長老として、永い信仰生活を終え召天しましたが、そのクリスチャンホームに育ち、あとに残った 10 人の子供達はすべて信仰の道に導かれて今日に至っております。私も主の救いのみわざにすべてをおゆだねして神の国の一員として受け入れられ、日々教会の奉仕に喜んで信仰生活を歩んでおります。娘牧子は桜美林短大一年生ですが、今ははっきりと神の存在をみとめ、洗礼準備のため学んでおります。私達も心から神に感謝し喜んでおります。すべて神のご計画の中に私達がおかれておる事を覚え、この様に神の愛がすべての人にそそがれておられる主をみとめ、み栄えのため献身の覚悟でおります。何卒兵士の一人として私達もコルネリオ会の交りに入れて頂き度くご交信をおねがいたします。主にあつて。

○ 猪狩栄勇兄（八施）

幹候校卒業以来、初めての九州勤務となり、鎮西部隊の一員として着任来、怒濤の如く激動するその過中にのめり込み、東奔西走の中に一ヶ月が過ぎました。C G S 在学中賜りましたご指導ご厚情に対し御礼申上げる機

会を逸したことを深く恥じ、改めて衷心より御礼旁々御挨拶申し上げます。

○ 勝山昌之兄（北千歳102大）

信仰とは望んでいる事からを確信しまだ見えていない事実を確認することであるといわれるように、最近では靈魂がひじょうに上ってきまして空が神秘的に見えるようになりました。また物に対する執着も少なくなり、欲望をおさえる事が出来るようになりました。コルネリオ会はどうなっていますか、どうぞ悪魔にうち勝って発展して下さい。

（兄からはしばしばお便りを頂き献金を頂いております。今井記）

○ 樋口 隆兄（元一陸佐）

武器補給処の勤務を最後に停年退職し、筑波研究学園都市において工業技術院のエネルギーセンター副所長兼電気技術主任として勤務することになりました。家から車で10分程の所です。今後共よろしく願ひいたします。

（自宅） 上浦市荒川沖南区6-306

○ 佐々木新次兄（元二陸佐）

何時も無音に打過ぎ失礼しております。退官後の生活にも馴れて参りました。皆様のご健康を祈ります。

（自宅） 大村市池田二丁目309-1

○ 武宮啓夫兄（二空佐）

尊い主の聖名を心から賛美いたします。この度下記に転居いたしました。近くにお出かけの際は是非お立寄り下さい。

53年12月22日、航空自衛隊20年10ヶ月の勤務を終り停年退官の予定です。今後共なお一層のご交誼を賜わりますようお願いいたします。

（自宅） 大宮市今羽町477-17 今羽町団地15-404